

高齢者居住住宅における庭利用に関する実態調査

高 田 宏

(2010年10月7日受理)

A Survey on the Actual Conditions of a Garden in Housing with Elderly Persons

Hiroshi Takata

Abstract: The purpose of this study is to clarify the actual conditions of a garden in housing with elderly persons. This study used interviews as the investigation method to grasp the usage situations of a garden, the characteristics of respondents, their lifestyles and their consciousness of their garden. 53 elderly persons who have lived in T residential estate in Kure city were surveyed from August to September, 2008. Based on the results of the interviews, three capacities for activity of elderly persons, which were “walking ability”, “daily performance”, and “going out”, were categorized into existence of an impediment and nonexistence of an impediment. The relationship between the capacities for activity and their usage situations of a garden was studied. As the results, it was shown that the garden provided for comfort and healing to elderly persons as the place of community and gardening. Also, gardens needed the maintenance proper for elderly person’s capacities.

Key words: Elderly persons, Garden, Housing, Interviews

キーワード：高齢者、庭、住居、ヒアリング調査

1. はじめに

我が国の高齢化率は20%を超え、高齢者福祉において「自立」が重要な目的の一つとなっている。介護保険制度では、在宅における自立した日常生活の重視を基本理念に掲げており、高齢者自らが主体的に生活を営むことが求められている。高齢者の生活は退職による外出機会の減少や身体的条件などによって自宅で過ごす時間が増加する可能性が高く、住居の居住環境はより重要となってくることが予想される。居住環境は居住者の身体面だけでなく、心理面においても影響を与える要素であり、特に活動範囲が自宅内に縮小された高齢者にとってその影響は大きい。

住宅の居住環境は、屋内だけでなく、屋外環境として庭の存在がある。庭は自宅敷地内でありながら内と外とをつなぐ中間的な空間であり、居住環境の中でも特殊な役割を持つ場であると考えられる。特に外出の機会が減少した高齢者にとっては、近隣と挨拶を交わ

す場、園芸などの趣味を楽しむ場、日光や植物から元氣や癒しを得る場など、庭の存在意義は大きいと考える。そこで、本研究では住宅の庭に着目し、高齢者居住住宅において庭がどのような機能を持ち、そして庭が一つの環境要因として高齢者の心理面や活動面にどのような影響を与えているのか、また、そこに生じる問題を解決していくにはどのような方法があるのかを考察するための基礎資料を得ることを目的とし、高齢者居住住宅におけるヒアリング調査を実施した。

高齢者の生活と住まい方の関連について、番場ら¹⁾は60歳以上の高齢者を対象に、日常生活や居室の使われ方などの調査を行い、居住環境を生活行為の「場」として捉え、「場」による使われ方の違いを明らかにしている。また、橋ら²⁾は一人暮らしの高齢者の住居を対象に、住居の間取りや居場所、家の中での生活の様子および外部空間との関わりについて調査を行い、住戸構造や住戸内での居住の仕方によって高齢者の外部との関わり方が影響を受けていることを明らかにし

ている。また、高齢者の生活実態と居住環境との関連を総合的に捉えた研究では、王ら³⁾は、閉じこもり現象のみられる高齢者の日常生活を分析し、高齢者の閉じこもり現象は、人的な要素、社会的な要素、住環境の要素といった様々な要素が関連して影響を与えているとしている。また、堀ら⁴⁾は、デイケア利用者に対し「個人因子」、「健康状態」、「心身機能・構造」、「活動」、「参加」、「環境因子」についての調査を行い、「環境因子」である住環境が「活動」および「参加」に影響を与え、同時に趣味活動を実施しやすい環境を整えることで「活動」、「参加」に影響を与える可能性を示唆している。これらは、物理的環境だけでなく、人的要素や本人の身体的要素、また生活における実際の活動や参加といった場面において、居住環境がどのような機能や役割をもち、他の要素にどのような影響を与えているかを追及しているという点では本研究の目的に非常に近い。しかしながら、居住環境を全体から捉えており、屋内に関しては言及されているものの、屋外環境である庭については明らかにされていない。そこで本研究では、高齢者を対象に、その個人因子や家族構成、活動能力、また実際の生活における活動状況などを総合的に捉え、その上で庭がどのような場として機能しているのか、その実態を明らかにする。

2. 調査概要

2.1. 調査目的

高齢者の生活実態、庭利用の現状、問題点をヒアリング調査により明らかにする。高齢者の生活実態において庭がどのような場として機能しているのか、また庭が一つの居住環境として高齢者の生活にどのような影響を与えているのかを考察するための資料とすることを目的とする。

2.2. 調査対象

広島県呉市T団地（以下、「T団地」と示す）在住の高齢者に調査を行った。対象者は65歳以上の高齢者で、ご自身の考えを回答することが困難な方は同居者が回答できる範囲のみで代理回答を行った。代理回答は1人である。ヒアリング調査を行い、53人から有効な回答を得た。

調査対象としたT団地についての概要を以下に記す。T団地には1,169世帯（T団地自治会調べ）が属している。T団地は呉市の中でも交通の便が悪い場所に位置しており、呉駅まではバスで30分、広島駅まではバスで1時間以上かかる。また、T団地は山の斜面に位置するため、団地内がすべて坂になっており、団地

の上の方に住む人は特に外出に不便を伴うと考えられる。

詳細なT団地についての情報として、総務省統計局の平成12年度及び平成17年度国勢調査⁵⁾のデータベースより、T団地のある番地の情報を引用する。

(1) 人口及び世帯総数

図2-1に平成12年度及び平成17年度国勢調査によるT団地の男女別人口及び世帯総数を示す。平成17年度のT団地の世帯総数は1,399世帯、人口総数は3,676人、男女別では、男性1,736人、女性1,940人である。平成12年度に比べると世帯総数は12世帯、人口総数は258人減少している。

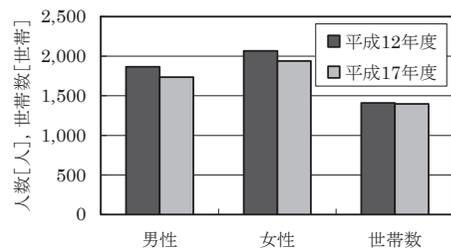


図2-1 T 団地の人口及び世帯総数（国勢調査結果）

(2) 年齢別人口推移

平成12年度及び平成17年度国勢調査によるT団地の年齢別人口を図2-2に示す。平成17年度で人口の多数を占める年代は55～69歳で、平成12年度から人口に大きな変動はみられず推移していることがわかる。調査を行った平成20年度も同様に推移していれば58～72歳の人口が多数を占めていることが予想される。若い年代においては人口の減少がみられ、高齢化が進む一方で、子供や子供を持つ親世代の土地離れが起きている可能性がうかがえる。

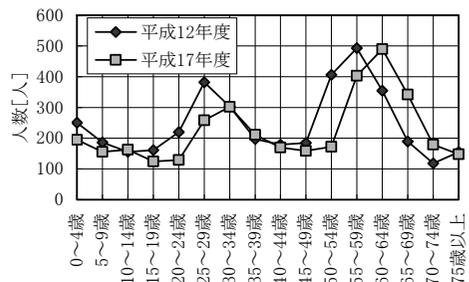


図2-2 T 団地の年齢別人口（国勢調査結果）

2.3. 調査方法

庭利用に関する実態調査は、住宅を直接訪問し、対象者本人にヒアリングする聞き取り調査とした。また、対象者の了解を得て、庭の簡単な見取り図を描き取った。調査実施時期は、平成20年8月上旬から9月下旬までである。

2.4. 調査内容

調査内容は、対象者の個人属性、対象者居住住宅の属性、そして庭の利用に関する項目の3部からなる。調査内容を表2-1に示す。

表2-1 調査内容

調査項目	具体的項目	
a) 個人属性	a1) 年齢, a2) 性別, a3) 世帯構成	
	a4) 家庭内の役割, a5) 趣味の有無	
	a6) 社会活動への参加状況	
	a7) 外出頻度, a8) 歩行の状態	
	a9) 外出に支障のある障害	
	a10) 日常動作における苦痛	
	b) 住宅属性	b1) 居住年数, b2) 所有形態
		b3) 階数, b4) 住宅改修経験
		c) 庭利用に関する項目
	c3) 庭に出る目的, c4) 庭に出る経路	
c5) 屋内から庭までの移動で不便な点		
c6) 庭内の移動で不便な点		
c7) 玄関から道路までの移動で不便な点		
c8) 洗濯物を干す上で不便な点		
c9) 隣家とのプライバシー		
c10) 庭を通じた近隣や家族との交流		
c11) 庭での植物栽培について		
c12) 植物を育てる上で不便な点		
c13) 庭に対する評価, 満足度		

3. 対象者の属性と日常生活に関する調査結果

3.1. 年齢・男女人数

対象者53人の平均年齢は74.4歳、最低年齢66歳、最高年齢93歳であった。年齢別構成割合を5歳区切りで図3-1に示す。85～89歳、90～94歳に該当する人数が極めて少ないため、以降では85歳以上でまとめて集計した。

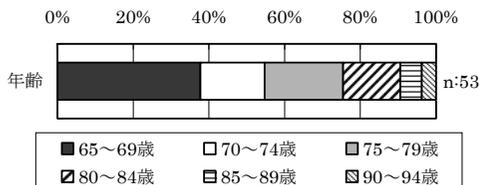


図3-1 年齢別構成割合

対象者のうち男性は16人、女性は37人で、女性が全体の70%を占めた。男性平均年齢は74.1歳、女性平均年齢は75.1歳である。年齢別の男女人数を図3-2に示す（なお、図中の（ ）内の数値はサンプル数を表している。以下同様）。どの年代においても女性の人数が多い。男女ともに、65～69歳、75～79歳の人数が多いことがわかる。

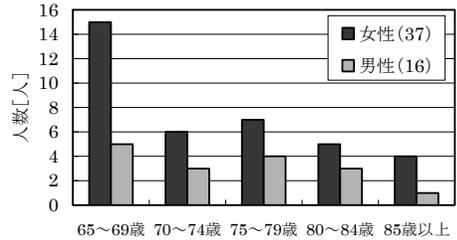


図3-2 年齢別男女人数

3.2. 世帯構成

世帯構成別の男女人数を図3-3に示す。「夫婦世帯」が男女ともに最も多く合計で29人、次いで「単身世帯」が9人であった。また、世帯構成は異なるが子供と同居している世帯も多い。「夫婦と子供夫婦と孫の世帯」の2世帯は、いずれも二世帯住宅であり、高齢者夫婦の主な生活空間は、子供夫婦と孫の生活空間とは異なっていた。

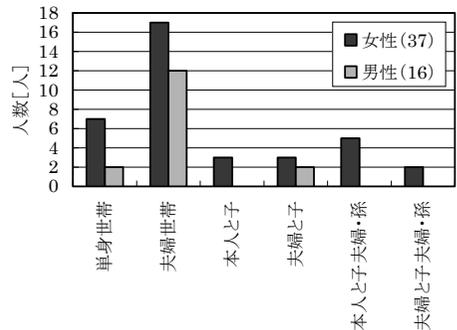


図3-3 世帯構成別の男女人数

3.3. 活動能力

ここでは、「歩行の状態」、「日常動作における苦痛」、「外出に支障がある障害」を活動に影響を与える個人の能力（以下「活動能力」とする）とし、それぞれにおける調査結果を示す。

(1) 歩行の状態

歩行の状態について、図3-4に回答構成割合を示す。「一人で歩行に不自由ない」が48人、「杖や歩行補助具が必要」が4人、そして屋内では「杖や歩行補助具が

必要」, 平坦な屋外では「介護が必要」, 道路や坂では「車椅子が必要」など, 歩行場所によって状態が変化する人が1人であった。

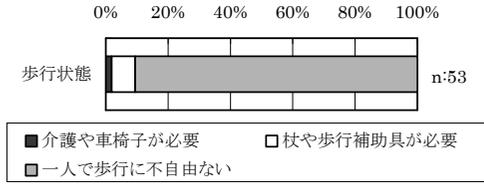


図3-4 歩行の状態

(2) 日常動作における苦痛

日常動作について, 図3-5に回答構成割合を示す。「特に不自由ない」は38人で, 他の15人は「階段の上り下りが苦痛」, 「立ち上がりが苦痛」, 「かがむのが苦痛」のうち1項目以上が該当していた。項目別では「階段の上り下りが苦痛」が13人, 「立ち上がりが苦痛」が10人, 「かがむのが苦痛」が8人であった。年齢が増すにつれて, 日常動作における苦痛がある人の割合が多くなる傾向がみられた。

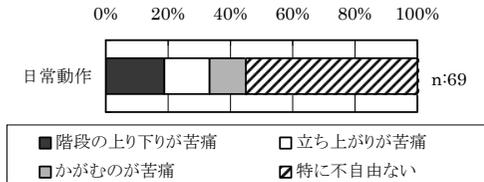


図3-5 日常動作における苦痛

(3) 外出に支障がある障害

外出に支障がある障害は「あり」11人, 「なし」42人であった。回答結果を図3-6に示す。外出に支障を感じている人は全体の約20%であった。

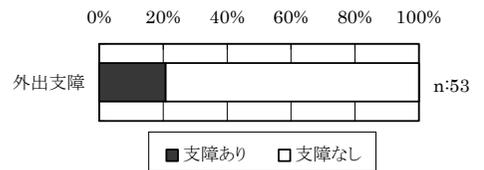


図3-6 外出に支障がある障害

外出の支障が「あり」と回答した11人の支障の内容を表3-1に示す。それぞれの回答をその内容によって分類すると, 足, 腰, 背中などの体の痛み, 手術や病気による歩行の不自由, 病気による外出控えが外出の支障となっていることがわかる。

表3-1 外出の支障の内容

外出支障の内容	分類
1.足と腰が痛い。 2.ひざと背中が痛い。 3.背中が痛い。 4.腰が痛い。	体の痛み
5.足が悪いため杖が必要。道に迷う。 6.股関節を手術したため, 歩きにくい。 7.腰を手術して一人で歩けなくなった。 8.左半身が使えず, 付き添いや車椅子が必要。	歩行の不自由
9.脳梗塞で倒れてからあまり運動できなくなった。 10.病気があるのであまり出歩かない。 11.病気により, 骨が弱いため外出時は頭を守るため面をかぶる。動作が鈍い。	病気による外出控え

表3-2 活動能力間の関連

年齢	歩行状態	日常動作	外出支障
70~74歳	不自由ない	不自由ない	病気による外出控え
75~79歳	不自由ない	不自由ない	病気による外出控え
80~84歳	不自由ない	不自由ない	病気による外出控え
65~69歳	不自由ない	不自由ない	体の痛み
80~84歳	不自由ない	不自由ない	体の痛み
75~79歳	不自由ない	階段, 立上る	体の痛み
80~84歳	杖・補助具等	階段	体の痛み
75~79歳	杖・補助具等	階段, 立上る, かがむ	歩行の不自由
75~79歳	杖・補助具等	階段, 立上る, かがむ	歩行の不自由
85歳以上	杖・補助具等	階段, 立上る, かがむ	歩行の不自由
85歳以上	杖・補助具等	階段, 立上る, かがむ	歩行の不自由
65~69歳	不自由ない	階段	支障なし
65~69歳	不自由ない	階段	支障なし
70~74歳	不自由ない	立上る	支障なし
75~79歳	不自由ない	階段	支障なし
65~69歳	不自由ない	階段, かがむ	支障なし
80~84歳	不自由ない	階段, 立上る	支障なし
85歳以上	不自由ない	立上る, かがむ	支障なし
75~79歳	不自由ない	階段, 立上る, かがむ	支障なし
85歳以上	不自由ない	階段, 立上る, かがむ	支障なし

(4) 活動能力間の関連

実際の生活の活動や参加といった場面で, それぞれの活動能力が与える影響を明らかにするため, 3つの活動能力, 「歩行の状態」, 「日常動作における苦痛」, 「外出に支障がある障害」が, それぞれどのような関連を持っているのかを示す。表3-2に活動能力の低下(不自由, 支障あり)に1つでも該当した人の活動能力の状態を示す。対象者は20人であった。表より, 「歩行の状態」において「杖や歩行補助具が必要」である人では「日常動作における苦痛」, 「外出に支障がある障害」のいずれも制限を受けており, また「外出に支障がある障害」において「歩行の不自由」を支障の要因にあげている人は「日常動作における苦痛」の数も多くなっていることから, 活動能力を最も低下させる要因は歩行における不自由であると考えられる。外出の支障はあるが, 歩行や日常動作には問題ない人では「病気による外出控え」が外出を制限する要因となっ

ており、日常生活に必要な身体能力には問題はなかった。

3.4. 対象者居住住宅の属性

(1) 居住年数

昭和46年にT団地が建売販売された当初からの住人が多く、居住年数33～37年の人が44人、途中からの居住者が4人で、それぞれの居住年数は11年、12年、20年、14年である。

(2) 所有形態・階数

所有形態は、持ち家が51人、子供夫婦の持ち家が2人である。階数は1階建てが7人、2階建てが44人である。建売当初は平屋と2階建てが交互に建てられていたが、増築をして2階を設けた人が多かった。

(3) 住宅改修経験

ここ数年での住宅の改修経験の有無を質問したところ、「あり」が28人、「なし」が25人であった。表3-3に「あり」と回答した人の住宅改修内容を示す。

表3-3 住宅改修内容

住宅改修内容		回答数[件]
手すり	トイレ	9 (1)
	風呂	9 (1)
	階段	9 (1)
	廊下	4 (1)
	玄関	5
	玄関から道路まで	4
段差解消	室内	5 (3)
	玄関から道路まで	4
建て増し		2
建て替え		5
その他		9

注) 表中の()内の数字は、建て替えの際に同時に施工した件数。()外の数字が単独による施工の合計件数である。

改修内容で最も多い項目は手すりの設置で、設置場所はトイレ、風呂、階段が多い。室内の段差解消の5件のうち3件は建て替えの際に施されている。「その他」は、老朽化によるリフォームや、テラスの設置などである。ここ数年での改修経験がない人でも「改修したい事はいろいろあるが、金銭的な問題上言い出したらきりが無い」、「今は必要ないが、そのうち必要になったらしたいと考えている」という意見が多く、関心を持っている人は多いようであった。その他に、「家を自分に合わせるのではなく、自分がその家に対応できることも大切」といった意見もあり、改修をすることで環境を自分に合わせるのではなく、可能な限りは自らがその環境に適応していくことが必要であるという、高齢者の居住環境を考える上で貴重な意見を得た。

また、年齢と住宅改修経験の関係をみると、年齢が高くなるにつれて改修経験がある人の割合は増加し、85歳以上では全員が何らかの改修をしていた。

次に、活動能力と住宅改修経験との関係を図3-7に示す。「歩行の状態」に不自由がある5人全員が改修を経験しており、歩行の不自由による動作環境の改善が行われていると考えられる。また、日常動作に苦痛を感じていた15人のうち80%が改修を行っていた。どの項目においても、不自由や支障がない人では、改修経験のある人の割合はいずれも50%以下であり、住宅改修経験の有無は活動能力の影響が強いと考えられる。

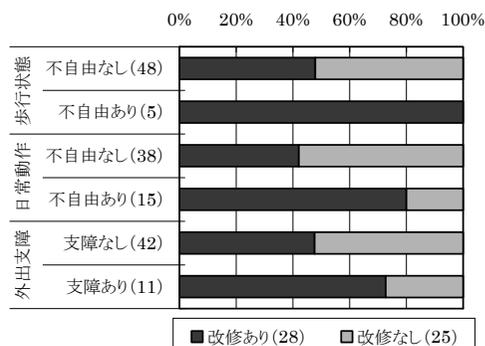


図3-7 活動能力と住宅改修経験の有無

3.5. 家庭内における役割

外出の機会が減少した高齢者は、住宅内が活動の中心となることが予想される。その中で「家庭内における役割」は、高齢者の住宅内での活動や参加状況を表すと考える。そこで、家庭内における役割を10項目に分類し、複数回答可で質問した。家庭内の役割の項目ごとの男女別回答人数を図3-8に示す。

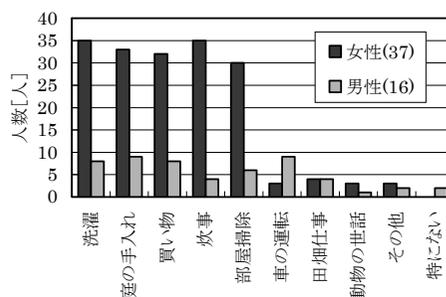


図3-8 家庭内の役割の項目ごとの男女別回答人数

基本的な家事である「洗濯」、「買い物」、「炊事」、「部屋掃除」は80%以上の女性が回答しているのに対し、男性は40%程度である。「庭の手入れ」は女性の89%が、

男性でも56%が手入れを行っていた。男性で女性よりも高い回答割合を得たのは、「田・畑仕事」と「車の運転」であった。

3.6. 趣味の有無とその内容

趣味の有無とその内容について質問した結果を示す。趣味の有無は「あり」41人、「なし」12人で、65%が何らかの趣味を持っていた。図3-9に活動能力と趣味の有無との関係を示す。

活動能力に問題がない人では80%以上が趣味を持っているのに対し、問題がある人では、特に歩行において、趣味がない人の割合が高くなっていった。活動能力と趣味の有無に何らかの関連がみられる。

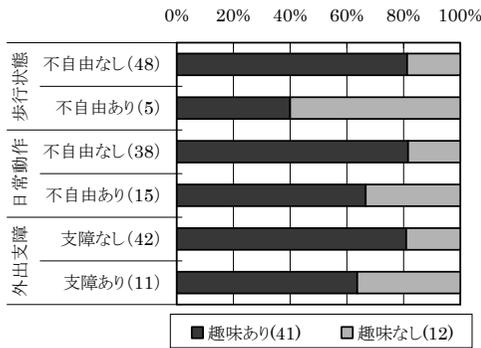


図3-9 活動能力と趣味の有無

趣味の内容を質問したところ複数の回答を得た。回答を内容別に分類し集計した結果を図3-10に示す。「体操・ダンス」や「スポーツ」から「絵・創作活動」、「茶道」まで多種多様な趣味活動が行われていることがわかる。

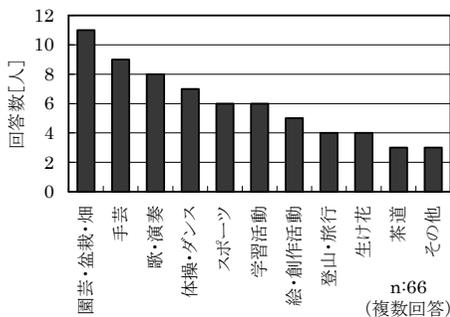


図3-10 趣味の内容

趣味の内容をその活動場所によって「教室・公民館」、「自宅」、「その他」に分類した。複数カ所を使用している場合は、該当する場所全てで計数している。

その結果、「教室・公民館」41件、「自宅」25件、「その他」9件であった。その他は、ゴルフ練習場(3件)、畑(2件)、登山・旅行(4件)である。図3-11に趣味の内容別の活動場所の内訳を示す。

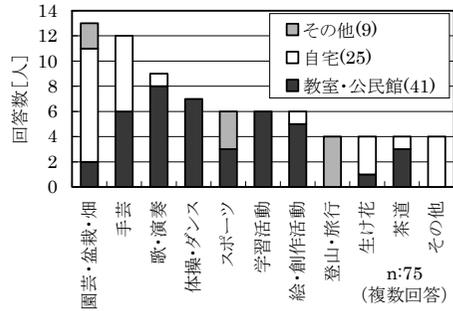


図3-11 趣味の活動場所

高齢者における趣味活動の有無やその内容は、趣味活動自体が「本人の活動能力に合った活動内容であるか」や、「利用可能な活動場所であるか」といった活動内容や場所の影響を強く受けていることが推察される。したがって、加齢や活動能力の低下が起る中で高齢者がどのような趣味を持つかが高齢期における趣味活動の継続や有無に大きく影響してくると考えられる。

3.7. 社会活動への参加状況

地域社会の中における高齢者の活動・参加状況を知るため、地域で行われる活動や趣味の教室など(町内会、祭り、老人クラブ、ボランティア、趣味の会、学習活動等)に参加することがあるかについて質問した。その結果、「よく参加する」が24人、「たまに参加する」が9人、「ほとんど参加しない」が20人であった。ここでいう社会活動には、地域で行われる趣味の会なども含んでいることから、趣味の有無による影響を受けることが考えられる。図3-12に趣味の有無と社会活動への参加状況との関係を示す。

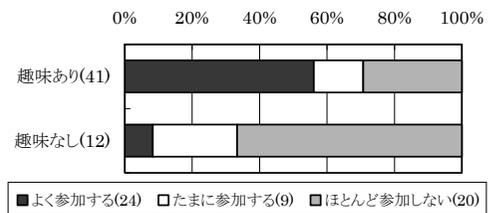


図3-12 趣味の有無と社会活動への参加状況

図より、趣味がある人は社会活動への参加状況も高く、趣味のない人は低くなっていることがわかる。今回の調査では趣味として公民館などを利用している人が多かったことから、その影響が強いと考えられる。

社会活動への参加状況の年齢別の回答割合を図3-13に示す。図より、65～79歳で「よく参加する」と「たまに参加する」の割合が多少上下するものの、「ほとんど参加しない」の割合は年齢が高くなるにしたがって増加していることがわかる。

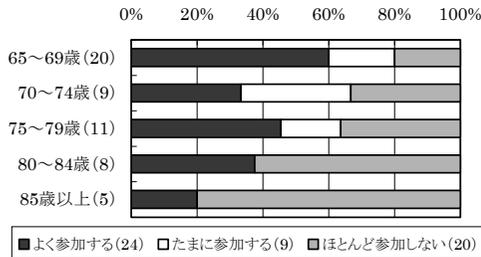


図3-13 社会活動への参加状況の年齢別回答割合

3.8. 外出頻度

外出頻度の低下は活動範囲を狭めることから交流の機会の減少や閉じこもり現象などの要因となる。

ここでは、外出頻度について「毎日外出する」、「2、3日に一度外出する」、「週に一度外出する」、「ほとんど外出しない」の中から質問した結果を示す。なお、外出には隣近所や買い物などの家の周囲も含む。

外出頻度における活動能力の影響について、外出に支障がある障害の有無と外出頻度との関係を図3-14に示す。図より、「支障なし」では「支障あり」に比べ「毎日」外出する割合が高くなっており、「支障あり」では外出を「ほとんどしない」人がいることから、活動能力における不自由の有無が外出頻度に影響していると考えられる。しかし「2、3日に一度」外出する人の割合は障害の有無による差異はみられず、また障害がなくても「週に一度」と外出頻度が低い人もいることから、活動能力以外の影響が考えられる。

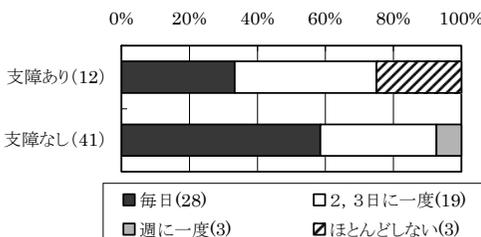


図3-14 外出に支障がある障害の有無と外出頻度

ここで、加齢に伴う外出機会の減少について趣味の有無と外出頻度の関係を見る。趣味の有無と外出頻度との関係を図3-15に示す。

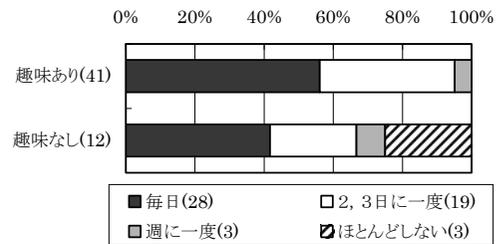


図3-15 趣味の有無と外出頻度の関係

図より、「趣味あり」では外出頻度も高いことがわかる。外出を「ほとんどしない」と答えた3人は歩行に不自由があり、そのことが趣味の有無に影響を与えていると考える。

以上より、趣味活動などの外出の機会が多くある人は外出頻度も高くなっていることがわかった。しかしながら外出の機会自体もまた活動能力による制限を受けていた。したがって、外出頻度を増加させるためには、本人の活動能力だけでなく、外出の機会となるような趣味活動や地域活動の場を増やし、その上で外出援助を充実させることが必要であると考えられる。

4. 庭利用に関する調査結果

4.1. 庭に出る頻度

対象者の庭に出る頻度を図4-1に示す。「1日に何度も」が43人、1日に1回以下が10人で、90%以上の人が1日に1回以上と高い頻度で庭を使用していた。

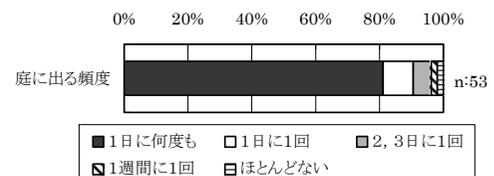


図4-1 庭に出る頻度

活動能力の「歩行の状態」、「日常動作における苦痛」、「外出に支障がある障害」と庭に出る頻度との関係を図4-2に示す。なお、庭に出る頻度が2、3日に1回よりも低いものは、「2、3日に1回以下」にまとめて集計している。

図より、活動能力において不自由や支障がある人で

は、ない人に比べて庭に出る頻度割合が少なくなっていることがわかる。特に「歩行の状態」の影響が大きい。しかし、「日常動作における苦痛」や「外出に支障がある障害」で不自由や支障がある人の60%以上が「1日に何度も」庭に出ると回答していることから、活動能力が低下した人でも、庭は使用しやすい場所であることがわかる。

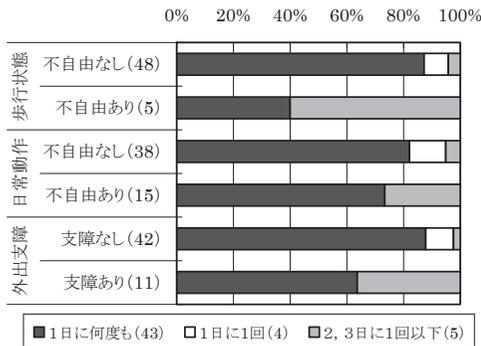


図4-2 活動能力と庭に出る頻度

4.2. 庭に出る目的

庭に出る目的の項目別に男女別回答人数を図4-3に示す。「植物の世話」は男女ともに多く、女性の84%、男性の69%が回答していた。「洗濯物」と「庭掃除」は女性で共に約70%の高い回答を得たのに対し、男性ではそれぞれ44%、25%と低い。「気分転換」は男女による差はみられず共に約40%が気分転換のために庭を利用していた。

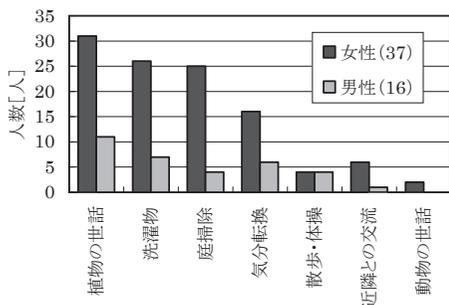


図4-3 庭に出る目的の男女別回答人数

4.3. 庭利用に伴う動作環境

庭利用に伴う動作環境について、「屋内から庭へ出るまで」、「庭内を移動する際」、「玄関から道路まで」、「洗濯物を干す際」の不便の有無を質問した。どの項目においても、不便があると回答した人は10人未満で、その内容の多くは「段差」に関するものであった。

4.4. 植物の栽培

対象者の趣味で「園芸・盆栽・畑」の回答が多く、また庭に出る目的で「植物の世話」による利用が多いことから、多くの高齢者が植物を育てる場として庭を活用していることが明らかとなった。ここでは植物に関する質問の結果を示す。

(1) 庭における植物の栽培の有無

庭で植物を育てているかを質問した結果、「育てている」が40人、「育てていない」が13人で、75%の人が庭で植物を育てていることがわかった。図4-4に活動能力と庭における植物の栽培の有無との関係を示す。

活動能力に不自由や支障がある人では、ない人に比べて、植物を育てている人の割合は低くなっていった。しかし「日常動作における苦痛」や「外出に支障がある障害」に不自由や支障がある人では比較的高い割合で植物の栽培が行われていた。

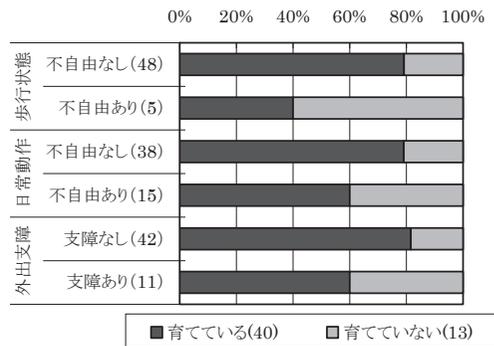


図4-4 活動能力と植物の栽培

(2) 植物の栽培による楽しみ

庭で植物を育てることを楽しみだと感じるかについて質問した。その結果、本人回答を得られなかった1人を除く52人中、「感じる」が44人、「どちらともいえない」が7人、「感じない」が1人であった。

(3) 植物の栽培における不便

植物や野菜を育てる上で、広さや使いにくさ等の不便な点がないかを質問した。その結果、「不便あり」が14人、「不便なし」が36人、育てていないため「わからない」が3人であった。

不便を感じる理由を大きく分けると「狭い」、「畑が欲しい」、「日当たり（日当たりが悪い、良すぎる）」、「自分の家でないため自由にできない」、「手入れが面倒」に分けられた。不便を感じていない人の多くが、庭に花壇や畑を設けている、もしくは畑を違う場所に借りていることから、植物を育てる上で自由度の高い花壇

や畑などの存在が大きいことがわかる。また、たくさん植えても体力的に難しいと感じている人においてはプランターで育てている状態をちょうど良く感じていた。「不便あり」、「不便なし」の両者の意見から、自宅の庭で植物を育てる環境としては、①個人の身体的能力に見合う広さの確保、②自由度の高い畑や花壇の設置、③日当たりなどを考慮した庭の配置などが必要であると考えられる。

4.5. 室内からの庭の眺め

室内のいつもの場所から庭が見えるかを質問したところ、「見える」が52人、「見えない」が1人だった。見えた方がいいと思うかについて質問したところ、本人回答を得られなかった1人を除く52人全員が「見えるといい」と答えた。室内から庭が見えることで、緑や日光、空や夕日などの自然や風景を近くに感じられることにメリットを感じていた。庭に出る頻度や使用方法に限らず、室内から庭が見えることで多くの人が精神面や環境面に良い影響を感じていた。

4.6. 庭を通じた近隣や家族との交流

庭を通じて近隣や家族との交流があるかについて質問した。その結果、「あり」が44人、「なし」が6人、「あまりなし」が3人であり、94%の人が庭を通じて近隣や家族と交流していた。交流があると答えた44人にその内容を質問した。回答を筆者が内容別に分類した結果を図4-5に示す。

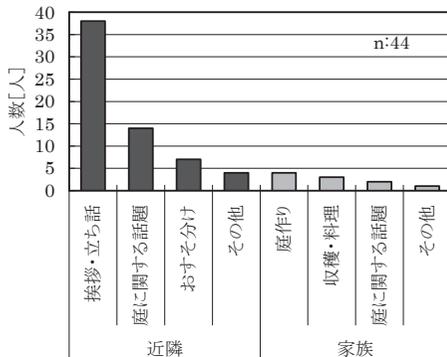


図4-5 庭を通じた近隣や家族との交流の内容

近隣との交流に関する内容は41人から得ることができた。その内容により、「挨拶・立ち話」、「話題」、「おすそ分け」、「その他」に分類した。家族との交流は、近隣との交流に比べて少なく、10人の回答があった。日常生活において他人との交流が希薄化している現在、家族だけでなく近隣との間においても交流があることは、注目すべきことであると考えられる。自宅内でありながら屋外であり、常に外との繋がりを持つ庭の特

殊性が、高齢者と近隣社会とをつなぐ役割を果たしていることがわかる。

一方、交流がない人にその理由を質問した結果、交流がない原因は、庭に出る頻度が低いこと、耳の不自由、そして庭と隣家や道路との位置関係などが影響していた。耳の不自由については居住環境からのアプローチは難しいが、庭の位置関係においては改善の余地があると考えられる。

4.7. 庭における楽しみ

庭は自身の生活に楽しみを与える場であると思うかについて質問した。その結果、本人回答を得られなかった1人を除く52人中、「思う」が46人、「どちらともいえない」が6人であった。楽しみの内容については「自分で植物を育てる楽しみ」、「気分転換」など、その場自体が持つ癒しの効果を感じている人と、植物を育てること自体が楽しみで気分転換になるという人がいた。「どちらともいえない」と答えた6人にその理由を質問した結果、「庭に興味がない」という人が3人と最も多く、「体が不自由なためほとんど外に出ることがない」という人、「草取りなどが面倒だから」という人、また「植物を育てること自体は好きだが、自分の自由に出来ない」という人がいた。

4.8. 庭の満足度評価

総合的にみて、自宅の庭に満足しているかを「5. 満足である」「4. どちらかといえば満足」「3. 普通である」「2. どちらかといえば不満」「1. 不満である」の中から質問した。項目別の回答構成割合を図4-6に示す。「不満である」を選んだ人はいなかった。「どちらかといえば満足」が17人と最も多く、続いて「満足である」と「普通である」が15人、「どちらかといえば不満」は3人であり、多くの人が庭の現状に満足していた。

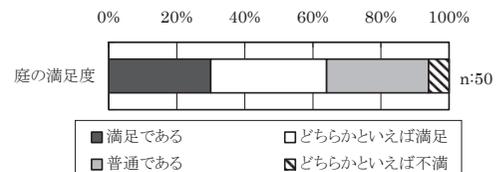


図4-6 庭の満足度評価

活動能力と満足度との関係を図4-7に示す。満足度の5段階評価の番号を配点し（「満足である」を5点、「不満である」を1点）、平均得点を求めた。

活動能力における不自由・支障の有無でみた平均得点は「歩行の状態」は「不自由なし」が3.8、「不自由あり」が4.3、「日常動作における苦痛」では「不自由なし」が3.4、「不自由あり」が4.0、「外出に支障があ

る障害」では「支障なし」が3.8、「支障あり」4.2と、活動能力に不自由や支障がある人の得点が高くなるという傾向があった。この理由について、活動能力に不自由や支障がある人は、ない人に比べて庭の利用頻度が低く、庭における活動が少ないため、不満やもっとこうしたいなどの希望を持ちにくいことが影響していると推察される。

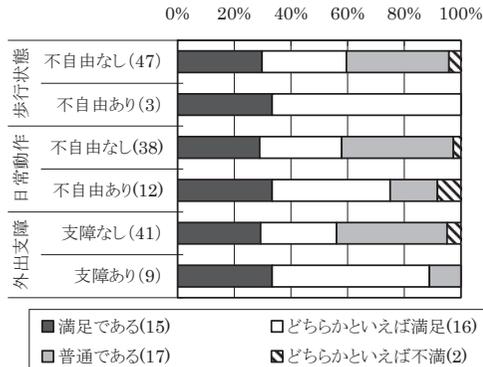


図4-7 活動能力と庭に対する満足度

5. おわりに

庭は住宅の中でも比較的自由度の高い空間であり、植物などを通して高齢者が働きかけやすい場となっていた。加齢に伴い、活動能力の低下などから育てる範囲は変化しているが、その中で自分に見合った園芸活動を楽しんでいる様子がうかがわれた。以上のことから、活動能力の低下なども考慮し、高齢になっても自由に楽しめるような園芸環境を整備することも、居住環境としての庭に必要な要素であると考えられる。

また自分だけでなく家族や近隣ともその喜びを共有できることにおいてその存在意義は大きい。在宅高齢者においては年齢が高くなるにつれて、社会や家庭での役割が減少し、その結果他者との交流が減少し、生きがいや楽しみの喪失が生じ、そのような様々な喪失感がさらに活動空間を狭小化させて、閉じこもりなどの状態に陥ることが危惧されている。しかし、本研究で着目した庭が持つ機能は、こうした高齢者の負の連鎖に歯止めをかけるものであると考える。老化による心身の衰退を完全に防ぐ事は困難であるが、そうした中でも、自宅という身近な環境でありながら、屋外環境として様々な機能や効果を持つ「庭」についても、

屋内環境や、バリアフリーに加えて今後の高齢者住宅の重要な視点となることを期待したい。

本研究は、広島県のある1つの団地における調査結果であるため、ある限られた条件、地域特性の下での考察である。また、対象者の身体能力が比較的高く、活動能力に問題がみられたサンプル数は少ないことから、必ずしも活動能力との関係が明確なものとは言えない。今後、様々な地域で様々な高齢者を対象に有用なデータが蓄積されることを期待する。しかし、サンプル数は少ないながらも、ヒアリング調査からは住宅改修について、対象者から「家を自分に合わせるのではなく、自分がその家に対応できることも大切」といった意見もあり、バリアフリーなどの高齢者対応の改修をただ推進するのではなく、高齢者の意識もあわせて啓蒙していくことで、より快適な居住環境が提供されたと考える。

なお、本論文のデータ収集には、当時広島大学教育学部第四類人間生活系コース学生の小泉萌さんにご協力いただいた。ここに記し、感謝の意を表す。また、本調査にご協力いただいたT団地の皆様に感謝の意を表す。

【引用・参考文献】

- 1) 番場美恵子, 竹田喜美子: 都市集合住宅居住の自立高齢者における「個」を中心とした住まい方の変容過程 - シルバーステージからみた高齢期の居住環境に関する研究 その1 -, 日本建築学会計画系論文集, No.592, pp.25-31, (2005)
- 2) 橘弘志, 高橋鷹志: 一人暮らし高齢者の生活における住戸内外の関わりに関する考察, 日本建築学会計画系論文集, No.515, pp.113-119, (1999)
- 3) 王青, 笈淳夫, 長澤泰: 在宅療養高齢者の生活領域に関する考察 - 高齢者の閉じこもり現象について -, 日本建築学会計画系論文集, No.546, pp.91-96, (2001)
- 4) 堀敦志, 本間博文, 桜井康宏: 介護予防を目的とした高齢者の住環境とADL・QOLの関係に関する調査研究, 日本建築学会計画系論文集, No.620, pp.1-7, (2007)
- 5) 総務省統計局: 平成12年度国勢調査及び平成17年度国勢調査